# 精神科医の思うこと㉙

## 病名を伝えるということ

松村　奈奈子

今は診療所や児童相談所などに勤務しているので、最近の流れで「発達障害」の診断をさせられてしまう場面が多いです。「僕って発達障害ですか？」「友達に自閉症やから診てもらえって言われて」なーんて受診する若い患者さんも増えました。ネット社会で、良くも悪くも「病気」について簡単に情報が得られる時代になった事も、大きく影響していると思います。

ただ、病気の名前を付けられるのは医師だけ、という事になっているので、なかなか重い仕事だと思っています。なんで、病名を告げる時には少し緊張し、悩む事も多いので今回は「病名を伝えるということ」

「発達障害」の診断が増えたこの頃ですが、精神科医としては「気分障害」「統合失調症」「てんかん」がメインの疾患です。ただ、気分障害（うつ病や躁病）は、本人も状態を自覚しており、よく知られた疾患であるので、病名の告知はわりとスムーズです。なので、今回は他の病名で緊張した思い出のあるエピソードを２つ

「統合失調症」の病名告知はいつも緊張します。長くお薬を飲まなくてはいけないし、症状が生活に大きく影響する病気だからです。

「患者さんがどういう風にこの病気を理解したら、上手く病気と付き合っていけるかしら」「どんな言葉をつかったら、わかりやすいかしら」「家族にどう説明したら、上手くサポートしてくれるかしら」などなど、事前に思う事はいっぱいです。そしてタイミングも悩みます。ただ、こちらが「伝えたいなぁ」と思ったタイミングが、患者さんから「僕の病名はなんですか？」と聞かれるタイミングにあっていることが多いです。そういうもんなんですよね。

病名を知らずに、お薬をのんだり、毎月通院するのは無理なもんです。「統合失調症」

は長期的に治療が必要な病気なので、もちろん病名を伝えるのは大切な事です。

その中で１番印象に残っているのは、まだ精神科医になって数年の若い頃の話です。外来に紹介状を持って３０代の男性と母親が受診されました。紹介状には、男性が国立大学を卒業後に関東で公務員をし、妻と子供と生活をしていた事。就職後すぐに発症した統合失調症で、仕事が継続できなくなり、家族とも上手くいかなくなり、京都の実家に独りで帰る事になったのでよろしく・・・という内容が書かれていました。いろいろお話を聞きながら、当然、病名告知は終わっているもんだと思っていたら「先生、僕の病名はなんですか？」と突然問われて「ええっ、聞かれてないんですか？」と驚きました。「お母さんは病名聞かれてますよね？」と横に座る母親を見ると、うつむいてしまいます。「母親は話してくれないんです。ちゃんと病名を聞きたいです」と男性は言います。男性は質問に対する反応もよく、知的に高く理解力もあるのが十分に伝わります。しかし、まだ初めてあった患者さんの事を十分知らないまま、病名を伝えるのは抵抗がありました。一方で、男性の強い思いも伝わり、母親に「お伝えしてもいいですか？」と聞くと「先生の好きなように」と困った顔で話します。もしかしたら、母親が病名を告げないよう前医にお願いしていたのかもしれません。病院を変えるのをきっかけに、男性は前に進みたいのかも、と感じて、私も覚悟を決めました。

理解力のある方には、統合失調症の病気の原因である神経伝達物質ドーパミン仮説の話から、なぜ症状がでるのか・・・などなど丁寧に説明する事にしています。そして、約１００人に１人の発症率や予後についても話します。医学部時代にも統合失調症を発症した学生はいました。やはり、仕事を継続するのが難しいケースが多かったという話を、いつもする様にしています。知的レベルに関係なく発症し、多くのケースで仕事の継続が難しくなるという事を伝えます。しかし、８０代の母親の車いすを押す、親孝行な患者さんを見る事も多く、家族として幸せに暮らすケースも多いという事も話します。そして最後に、「家族の会」や「患者さんの会」がある事も、お話しする様にはしています。私の説明より、当事者との交流が得るものが多いとも、考えています。

このような内容を話し終わると、男性は「聞けてよかった」と話し、母親はほっとしたような表情で私を見つめました。

その後すぐ、私は転勤となってしまったのですが、少したって当時の病院のソーシャルワーカーさんとランチした時に「そういえば先生のあの患者さん、地域の患者さんの会のリーダーになってましたよ」と聞きました。「そうか、そういう風に力を発揮してくれているんだー。そういう展開になったのか・・・」とちょっと嬉しくなりました。あの時、病名を伝えてよかったなぁと思いました。病名を知った事で、男性は前にすすんだんだなぁと思います。

もうひとつの思い出は、「てんかん」の患者さんでした。

「てんかん」は神経内科や精神科で診察する事が多いのですが、「てんかん」にはいろいろタイプがあって難しいので、私は発作がコントロールされるまでのお薬の調整は、てんかん専門の先生にお願いしています。なので、安定した患者さんの定期的な脳波検査とお薬をお渡しするのが私の仕事です。「てんかん」の患者さんですが、せっかく精神科に来てくれているので、ただお薬をお渡しするだけでは申し訳ないので、診察では、ちょっとした愚痴をきかせてもらったりして、すこしいい気分で帰ってもらうよう努めています。

２０代後半の男性が「てんかん」で通院されていました。お薬の調整も上手くいって、発作はコントロールされており、診察は雑談が中心でした。とっても爽やかで、モテるだろうなーと思ったので、もしパートナーが出来たら「てんかん」の事は先に話して理解してもらう事が大切、もしひとりでうまく説明できないならお手伝いはできる事、を時々話していました。男性はいつも「そんなん、まだまだっすよ」と笑っていました。

ところがある日突然、緊張した面持ちで男性は若い女性と診察室に入ってきました。「ん？えーと」とこちらが戸惑っていると、「結婚するねん、先生説明してくれるって言ってたやん」と顔を赤らめて話します。まじっ、聞いてないやん、前もって言ってよーと思いましたが、女性も何も聞いていないようで、キョトンとしています。そこで、男性が「てんかん」通院している事から説明を始めました。男性のてんかんは遺伝しないタイプで、長期的にお薬をのまなくてはいけないが、精子にはお薬の影響はない事などなど・・・こちらもやや緊張して説明しました。話し終わると、女性は「なんや、そういうことやったん」「なんも言わんと、ついてきてくれっていうし、何かと思ったわ」「そんなん気にしいひんで」と笑って話します。女性の笑顔をみて、男性は「ぷはー」と大きく息をはいて「よかったー」「緊張したー」と笑います。爽やかな若いカップルのやり取りに、こちらも一緒に笑顔になりました。医師をしていてよかったなぁと思えた時間でした。後にふたりは結婚し、いい感じだと報告を受けました。

病名を伝える事や病気の説明をするのは、医師の仕事であります。上手に使ってもらったら、いいと思います。

精神科の病名を伝えるのは、どんな病名でも未だに緊張します。疾患を正しく理解し、どうやったら前に向いていけるかを、一緒に考えるのが仕事かなぁと思っています。そして、長くお薬を飲み続けなければならない病気は、患者さんにとって大きな負担です。病気と付き合っていくうえで、仕事や家族や友人など周囲にどう理解してもらうかも、とっても大事です。ネット社会で情報は簡単に手に入るようになりましたが、間違った情報もあります。社会が変化して、私が医師になった頃より、精神疾患についての理解も十分ではありませんが、少しは前に進んだように思います。そんな中、医師としてどんなお手伝いができるのか、これからも考えていきたいと思っています。

そして、ここ数年の流れで、発達障害の病名を告知する場面が飛躍的に増えました。ケースにより、本人・家族の理解の仕方に特徴があるので、これもなかなか難しい。またいつか、それについても書いてみたいなーとは思っています。